

Whooops!

2017 SUMMER Vol. 16

多摩美術大学フィールドワーク設計ゼミ 発行

**TAKE
FREE**



ペンとインクが創造する宇宙

池田学展

シャセリオーとは何者か

茶道具に残る禅

音楽のきこえるイラストレーション / 永井博

映画ファンの夢を形あるものにする / 北見秋満

江戸の「視覚の制度」から脱却する / 山梨絵美子

動物を描く (ゾウ、キリン、モウコノウマ)

展覧会を作る / TAMABI select-3-

多摩美生の愛読書

自然や生命への「かそけき」感覚を引き出す / 香瑠鼓



3 Whoops! 見聞記

ペンとインクが創造する宇宙
 ／「池田学展」(金沢 21 世紀美術館)
 シャセリオーとは何者か
 ／「シャセリオー展」(国立西洋美術館)

7 Whoops! 考

茶道具に残る禅

8 Whoops! インタビュー

永井博／音楽のきこえるイラストレーション
 北見秋満／
 まだ形になっていない映画ファンの夢を
 形あるものにする

11 Tamabi Report

山梨絵美子／
 画家たちは江戸の「視覚の制度」からの脱却を試みた

12 Whoops! 体験記

動物を描く
 展覧会を作る／TAMABI select-3-

16 zoom up

香瑠鼓／
 自然や生命への「かそけき」感覚を引き出す
 独自のメソッドを開発

18 Whoops! の棚

多摩美生の愛読書

Whoops![ウーブス] 2017 SUMMER Vol.16

発行日 = 2017 年 07 月 15 日

編集長 = 小川敦生 (多摩美術大学芸術学科教授)

編集・誌面デザイン = 笛木一平、松澤遼、椋田大揮、山田浩子、板垣万由子、佐藤隆之、青木真梨恵、新西光之介、野田美紗子、小川敦生

表紙レイアウト = 板垣万由子

表紙写真 = 「TAMABI select-3-」展に出品された森本眞生さんの作品 (→ P.14)

発行 = 多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒 192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

印刷 = 株式会社ハシモトコーポレーション

問い合わせ先 = aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webzine 「タマガ」 = QR コード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



(上) 永井博エキシビジョン "Penguin's Vacation Restaurant" 会場風景 → P.8

(下) 香瑠鼓さんのワークショップより → P.16



Whoops! について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名「Whoops!」は、「あっ！」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。そんな思いを込めて制作しました。お読みいただくうちに小さな「あっ！」が生まれてくれますように！



《興亡史》(2006年、紙にペン、インク、200×200cm、高橋コレクション、撮影：宮島径 ©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery)

Whoops! 見聞記

「池田学展 The Pen -凝縮の宇宙-」(金沢 21 世紀美術館)

ペンとインクが創造する宇宙

1mmに満たないペン先で、大きな画面に世界を描ききる画家、池田学。6月下旬、金沢21世紀美術館を訪ね、作家初という大規模個展を見た。作品の前に立つと迫力に圧倒されるが、それで終わりではなかった。ぎっしりとさまざまなものが描かれ、細部を観察するほど、新しい発見があるのである。担当学芸員の内呂博之さんは「次第に遊び心に惹かれていった」と言う。

見上げるほど大きな画面の中の巨木は、激しい波に打たれながらも、その曲折した枝に力強く花々をたたえている。池田学が制作に3年3か月の歳月をかけ、アメリカ・ウィスコンシン州マディソンのチェゼン美術館で描き上げた最新作《誕生》の正面に立つと、その迫力にただ圧倒されるしかなかった。しかし、絵の細部に目を凝らした時、さらに驚くことになる。作品はペンによる線の集積として構成されており、しかも1本1本の線は太さが1mmにも満たないのだ。なんと途方もない仕事をしているのだらうと、思わず制作風景を想像してしまう。

作家初となる大規模個展は、今年1月から10月にかけて佐賀・金沢・東京の3都市を巡回している。6月下旬金沢市を訪れ、開催中の金沢21世紀美術館の「池田学展 The Pen - 凝縮の宇宙 -」の担当学芸員、内呂博之さんに話を聞いた。



《存在》(2004年、紙にペン、インク、145×205cm Collection of JOAN AND MICHAEL SALKE ©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery)

池田の作品の特徴は、「全体のボリュームと細部の緻密さが共存していることだ」と言う。引いた位置から見ると1本の木を描いた風景画なのだが、近寄って細部を観察するとまったく違った楽しみ方ができる。あるところにはなぜかものすごく小さな電車が走っているし、別の部分を見ると壊れたルーレットのよ

うなものが半ば幹に埋め込まれたように描かれている。無限とも思えるほどの要素がぎっしり描かれており、細かく見れば見るほど発見がある。まるで、木が一つの世界、いや宇宙を形作っているかのようなようでもある。それらはユーモアなのか風刺なのか、作家から観る人への特別なメッセージなのか。作品名の《誕生》



《コヨーテ》(2008年、紙にペン、インク、30.7×22.7cm、(公財)東京動物園協会発行「どうぶつと動物園」掲載 ©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery)

《誕生》(2013～16年、紙にペン、インク、透明水彩、300×400cm、佐賀県立美術館蔵 photography by Eric Tadsen for Chazen Museum of Art ©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery, Tokyo / Singapore)



《誕生》(部分)



《誕生》(部分)

とはどんなつながりがあるのか。そういったことを考えるのも楽しくてしかたがなくなる。

内呂さんは展覧会の準備を進める中で、「最初は構築性や描写力に優れた画家と認識していたが、次第に彼の遊び心に惹かれていった」と話す。美大などでは、たとえばデッサンを描くときに、ディテールにこだわりすぎると全体のバランスが崩れてしまうことがある。池田はそんな常識とは別世界に生きているとしか思えない。とにかく細部が楽しいうえに、全体を見てもとても魅力的な宇宙を作っているのだ。しかも、池田は下描きなしで作画に臨んでいるという。度肝を抜かれるばかりである。

この展覧会では、金沢21世紀美術館の第1～第6展示室が使われている。同館の展示室は多くが独立した箱のように存在しているため、全体の構成や個々の作品の配置に内呂さんは最後まで悩んだという。展示作業をする

ときに帰国したばかりだった池田本人も、どの部屋でどの作品を見せるかについては、特にこだわっていたという。

最初の展示室では、空想の岩山を描いたという東京藝術大学デザイン科の卒業制作《巖ノ王》を正面に据え、初期の大きなモノクロ作品3点が飾られていた。第3展示室は、生き物を描いた絵だけの空間。首が描かれたコヨーテの毛並みを観察するだけでも、なんだか楽しい。「ああ池田さんはこんな子どもだったのか」と納得するような幼少期の作品や手紙が通路に並べられたスペースをはさみながら、時系列で初期の表現から現在までに表現がどう広がったのかを追うことができる。《誕生》に巡り合えるのは、最後の第6展示室だ。

内呂さんが初めて目にして、強い印象を受けた作品は、《興亡史》だったという。たくさんの日本の城が集まって、まるで1本の巨大な

樹木を形作っているような作品だ。思わぬところから仏像の手がたくさん出ていたり、なぜかビルの建設工事中のクレーンがいくつも設置されていたりする。ということは、この樹木とも建物ともつかない巨大な何かは、成長している途中なのだろう。「亡」の後の「興」を描いているのだろうか。内呂さんは思い入れがあるだけに、この作品をはたしてどこで見せればよいのか考えに考え、この展示室に置くことにしたという。たしかに《誕生》とよく響き合っているように感じた。

とにかく細部が楽しい作品が多いので、虫めがねや単眼鏡を持っていくのがお勧めだ。秋には東京でも展覧会があるからまた行きたいと思う。きっとさらに新しい発見ができるに違いない。

取材・文・レイアウト＝青木真梨恵



金沢21世紀美術館「池田学展」展示風景 (撮影：木奥恵三)



金沢21世紀美術館
学芸員内呂博之さん

「池田学展 The Pen -凝縮の宇宙-」

【佐賀展】(終了しました)

2017年1月20日～3月20日、佐賀県立美術館

【金沢展】(終了しました)

2017年4月8日～7月9日、金沢21世紀美術館

【東京展】

2017年9月27日～10月9日、日本橋高島屋

Whoops! 見聞記

シャセリオーとは何者か

東京・上野の国立西洋美術館で「シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才」が開催された。19世紀フランスの画家シャセリオーは、かのアングルのもとで学び画家として順調な道を歩み始めながらも、やがて師とは決別。さらにはアルジェリアへの旅が新たな展開をもたらした。



シャセリオー展が開かれていた国立西洋美術館外観(*)

東京・上野の国立西洋美術館で開催された「シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才」に足を運んだ。不勉強ながら、テオドール・シャセリオー(1819~56年)は初めて聞く名前だった。19世紀フランスといえばミレーなどのバルビゾン派や印象派だが、実際に同館で作品を見ると、どちらかといえば写実的な表現を得意としている。モネやルノワールとはまったく違った画風から、一体どんな画家だったのだろうと逆に興味が湧いた。

展覧会を見てまず分かったのは、シャセリオーが独特のポーズの裸婦を描いた《グランド・オダリスク》や《泉》などの作品で知られるドミニク・アングルの弟子だったことだ。しかし、弟子はまた独自の道を歩んだことが分かった。

展示室に入って最初に目にしたのは《自画像》だった。灰色と緑色が混ざり合った風景に、黒い厚手のコートを着て、顎のあたりまで垂らしたこげ茶の髪をカールした画家が左手をコートの中に差し込み、赤いクロスがかかった台の上にある本に手を伸ばしながら、こち

らを見ている。制作年は1835年、10代なかばの作品だ。同展のカタログによると、シャセリオーはどれも美男子とは言いがたい人物だったようだ。後に恋人となる女優アリス・オジーからは、「醜い小男」と呼ばれていたという。しかし自画像はなかなか端正でスマートだ。この頃はドミニク・アングルに就いており、将来を前向きに見る自分を描こうとしたのかもしれない。実際、翌年には当時のフランスの画家のエリートコースだったサロン(官展)に入賞する。

しかし、1840年を境に師であるアングルと決別する。師を追うばかりが能ではないのは確かだ。そして歩み始めたのが、ロマン主義への道である。神話を題材にこの時期描いた《アポロンとダフネ》が見せる官能性の高い表現を目の当たりにして、まるで舞台の一場面に自分が立ち会ったかのように作品の世界に引きずり込まれた。

旅は誰にとってもいい経験になる。その後シャセリオーに大きな変化をもたらしたのは、1846年のアルジェリア旅行だった。アルジェリアは北アフリカにあるが、長らくオスマン帝国の支配下にあって東方の文化が流入する。シャセリオーが生きた時代には、フランスが植民地にした。

「実際に体験した、生き生きとして、現実的なオリентを表現するのか? それとも夢想され、再構成され、理想化されたオリент

を連想させるのか?」

帰国したシャセリオーは、自分の中で2つの意見を戦わせたという。たとえば《コンスタンティヌスのユダヤ人街の情景》と《雌馬を見せるアラブ人の商人》では、赤ん坊を寝かしつける家族の姿や馬を売る商人を取り巻く人々という現実の風景を描いた。しかし《気絶したマゼッパを見つけるコサックの娘》はどうだろう。死んで虚ろな目をした馬の上に折り重なるように倒れたウクライナの英雄マゼッパの前に立つのは、コサックの少女である。この構図は、絶望の中にも美の世界に昇ることが可能な道があることを思わせる。その重要な役割を果たしているのが、少女が着た民族衣装である。

《泉のほとりで眠るニンフ》のモデルは、1849年に出会い画家の人生を翻弄した女優のアリス・オジーだった。鬱蒼と茂った森の中で体を横たえたニンフの、何と官能的な何か。彼女が脱ぎ捨てたらしきバラ色のドレスや金の首飾りは、この裸婦が実は神話のニンフではなく、19世紀の同時代の女性であることも明かしているという。1856年に描いた《東方三博士の礼拝》は、登場人物の服装が中東の民族衣装に似ている。旅で見たオリエントの現実が、聖書という物語の世界の中で生きている。シャセリオーは、旅を経て、物語に現実味を帯びさせた画家と言えるのではないだろうか。

取材・文・写真(*)・レイアウト=椋田大揮



《自画像》(1835年、ルーヴル美術館所蔵)



《気絶したマゼッパを見つけるコサックの娘》(1851年、ルーヴル美術館蔵、ストラスブール美術館寄託)



《東方三博士の礼拝》(1856年、フティ・バレ美術館蔵)



《雌馬を見せるアラブ人の商人》(1853年、ルーヴル美術館蔵、ルーヴル美術館寄託)

「シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才」
会期：2月28日～5月28日(終了しました)
会場：国立西洋美術館(東京・上野)

作品写真は全て「シャセリオー展」カタログ(国立西洋美術館発行)からの引用

※この記事はWebzine「タマガ」に掲載された記事(2017年5月24日付)を一部加筆して再録したものです。

Whoops! 考



茶 道 具 に 残 る 禪

東京国立博物館で「特別展 茶の湯」が開催された。日本に「喫茶」の習慣が中国から伝わったのは12世紀頃という。そこには禅との深いかかわりがあり、現代の茶道にもその名残りを見ることができた。

東京・上野の東京国立博物館で開催された「特別展 茶の湯」を鑑賞した。日本で粉末の茶を楽しむ習慣「喫茶」が始まる12世紀頃から明治時代までの茶道具を見渡した、スケールの大きな展覧会だった。

会場を歩いていて、特に心に残ったことが一つあった。茶の湯の場で使われる掛け軸や茶碗を置く天目台に、禅宗の影とでも言うべきものを見たことだ。今でこそ茶の湯は極めて日本的な文化の一つとして捉えられているが、元々は中国の南宋時代に流行した喫茶の方法が禅僧や商人によって日本に伝えられ、発展したものだ。最初抹茶は、眠気覚ましのために用いられたという。時代がくだると、独自の価値観や決まりごとが作られて、「喫茶」は次第に禅宗から遠ざかるのである。

しかし茶道具の一部には禅宗の仏具と似た形のものがあり、まさしく禅宗の名残りが見えた。それが天目台だ。この展覧会には天目台も単体で展示されていたが、茶碗を置く道

具である天目台の一つである《屈輪輪花天目台》は、仏壇に茶を捧げる仏具「茶湯器」としても形が似ていた。

12世紀の中国から輸入した掛け軸や茶道具と呼ばれる空間で茶の湯に取り上げられる。それが茶道具に発展したという。そもそも、天目台も茶湯器の一つだった可能性もあるようだ。

掛け軸は、巻物を掛ける形式面だけで茶の湯の場に残ったわけではない。会場で見た《六祖截竹図》と《六祖破経図》などは、禅の教えを表す内容だ。《六祖截竹図》は、中国の禅僧、六祖慧能が鈍(なた)で竹を切った後に悟りを得た様子を描いたもの。禅の悟りは文字や説法などで伝えられるものではないことを經典を破ることで表現したのが《六祖破経図》だ。もともとはこうした絵を掛けた空間で茶をたしなむことで、禅の教えを受け止めていたわけだ。

茶の湯の場に掛かる軸物は、絵ばかりでは

ない。《一行書 一夜落花雨満城流水香》は「一休さん」の愛称で知られる禅僧の一休宗純が書き記したものだ。仏の教えは密かに伝えられたものでも、一夜の雨に落ちた花が町全体の流水を香らせるように広まっていくという意味があるという。本来は禅の教えを見せるための掛け軸が茶の湯の場を飾るのは、なかなか興味深いことである。

現代の茶道は総合芸術として捉えられ、禅の教えを学ぶ場と認識されることはあまりないかもしれない。だが、かの千利休も禅を学んだ茶人だったし、実際禅寺には茶室が多い。修行の一環として茶の湯があったことを想像すれば、作法に厳しく静ひつな空気に満ちた茶道の現在に、また感慨を深めるのである。

取材・文・レイアウト = 椋田大揮
イラスト = 板垣万由子

「特別展 茶の湯」
2017年4月11日～6月4日（終了しました）
東京国立博物館（東京・上野）

Whooops! インタビュー

音楽のきこえ イラストレーション

永井博さん (イラストレーター)

プールサイド、強い日差し、汗ばむ T シャツ——。永井博さんは、鮮烈なイラストレーションを描く。やむをえず使ったアクリル絵の具が、世界を開いたという。



写真はすべて "Penguin's Vacation Restaurant" 会場風景

5月下旬、青山スパイラル地下1階のレストラン、CAYを訪れた。大瀧詠一らのアルバムジャケットなどを多数手がけてきた永井博さんの作品から初夏の空気が漂う、トロピカルなものをピックアップした永井さんの原画展 "Penguin's Vacation Restaurant" の会場だ。ビルの1階から階段を下ると、永井さんのイラストレーションを元に数々のクリエイター13人が制作した架空のレコードジャケットが展示されていた。これらの作品を見るだけでも、永井さんが約40年にわたって作ってきた世界の空気が伝わってくる。

強い日差し、たとえば大学生のような特別でないごく普通の人々、青さが黒く感じるほどに澄みきった空、汗ばむ T シャツ…。会場のレストランに入って見た永井さん自身による作品の数々は、やはり鮮烈だった。アクリル絵の具で描いているという。

永井さんのテーマは、「ずっと自分の中にあった」と話す。もともと油彩で絵を描いていた永井さんに、初めてアクリルで描いたという雑誌の巻頭特集の絵を見せてもらった。1975年、デザイナー、音楽評論家などの仕事で知られる湯村輝彦さんから、「雑誌の



巻頭特集でイラストを描いてみないか」という依頼を受けたときの一枚だ。急ぐ必要があり、やむをえず乾きが速いアクリルを使った。

永井さんは描いてみて、アクリル絵の具が自分の求めている発色をしていることに気づく。突き抜けるような色彩がそこにあった。以来、永井さんはアクリルを使い続けた。「強い日差し」も「澄みきった空」もアクリル絵の具との出合いが生んだ表現とも言えるのだ。

イラストは、写真を元に描いているという。その写真の嗜好にも、すでに永井さんの永井さんたる部分が表れている。たとえば、永井さんが選んだのは帽子の影が落ちて目元が黒くかげっている写真。影が、日差しの鮮烈さを際立たせている。そして永井さんのイラストは、影が空や水と鮮やかな

コントラストを見せている。思えば、70年代にブルース・ウェーバーの写真に感化され、彼が写したアメリカの風景と永井さんのイラストのテーマである風景がうまくかみ合った感覚があったようだ。

大瀧詠一の『A LONG VACATION』、サザンオールスターズの『ジャズマン』など、永井さんは音楽アルバムのジャケットのイラストを多く手がけてきた。永井さんのイラストは、音楽とともうまくかみ合っている。ミュージシャンたちの音楽と一体になっていると言ってもいいくらいだ。

かつて、「ジャケ買い」という言葉があった。音楽アルバムのジャケットが購買者にファーストインパクトを与え、楽曲自体を聴かずに、デザイン性に惹かれて買う行為を指す。

音楽の録音媒体がレコードからカ



セットテープ、CDそしてデジタルデータへと移行する中で、ジャケットの存在感は希薄になりつつある。永井さんは「寂しいね」と言う。しかし、「そのことに絶望はしていない」と続けた。

日本レコード協会の統計によると、2009年に約10万2000枚に落ち込んでいたアナログディスクの生産量はその後おむね右肩上がりの回復を続け、16年には約79万9000枚に達している。ブームというよりも復権というべきかもしれない。しかも、買っているのは、CDが媒体の主流となった時代に生まれ育った若者という。パソコンやスマホで簡単に音楽が聴ける時代に、わざわざジャケットからレコード盤を出してプレイヤーのうえに置き、レコード針を載せるなどの操作をする手間をかけて楽しむ若者が増えているのだ。

LPレコードの大きなジャケットは、その音楽作品の「顔」である。永

「永井博エキシビジョン”Penguin’s Vacation Restaurant”」

会期：2017年5月18日～7月4日（終了しました）

会場：CAY(東京・青山、スパイラルB1F)

井さんは最近、ある若いインディーズのバンドから熱心にレコードジャケットの制作依頼を受けたそうだ。「それが形になったときのバンドメンバーの喜んだ顔が忘れられない」という。音楽というのは、ただ音だけで成り立っているわけではないことをひしひしと感じるエピソードだ。そして永井さんの描くイラストは夏の日差しや汗ばんだTシャツの感覚を蘇らせ、レコード盤をプレイヤーにかける前にすでに音楽を聴いている気分させてくれるのである。



取材・文・レイアウト＝野田美紗子

写真＝小川哲汰朗

永井博（ながい・ひろし）

1947年 徳島市に生まれる。1978年よりフリーのイラストレーターとして活躍。大瀧詠一の「A LONG VACATION」「ナイアガラ ソングブック」などのレコードジャケットを描く。「A LONG VACATION」は、CBSソニーの「アルバムジャケット特別賞」として、ゴールドディスクを受賞している。近年ではAORのコンピレーション「breeze」シリーズ、ikkubaru「Amusement Park」、「brighter」、TEEN RUNNINGS「NOW」、サニーデイ・サービス「DANCE TO YOU」のジャケットのイラストを担当。またZoffの2016年サングラスキャンペーンやSUBARU WRX S4のテレビCMでもイラストが起用された。現在はデザイン、DJなど多岐に渡る活動を展開している。



湯村輝彦さんから依頼を受け、永井さんがアクリルで初めて描いた雑誌の巻頭特集の一部。このイラストからも強い日差しや、アメリカの空気を感じることができる

Whooops! インタビュー

北見秋満さん (ヨコハマ映画祭実行委員長) まだ形になっていない映画ファンの夢を 形あるものにする



受賞者に贈られるトロフィー



北見秋満 (きたみ・あきみつ)

1956年、新潟県佐渡市生まれ。ヨコハマ映画祭には第1回から実行委員として参加し、第13回からは実行委員長として賞の選考や企画の立案をリード。横浜の映画館とのコラボ企画にも積極的に取り組む。最近の主な企画として TOHO シネマズららぽーと横浜との企画開発、第11回ららぽーとヨコハマ映画祭。シネマジック&ベティでの「私が助監督だったころ (松永大司 VS 橋口亮輔) (西川美和 VS 大崎章)」などがあげられる。

今年38回目を迎えたヨコハマ映画祭。1980年の立ち上げ当時、主力メンバーは3人の映画ファンだった。彼らから運営を引き継ぎ、現在実行委員長を務めている北見秋満さんに話を聞いた。

ヨコハマ映画祭は、毎年2月、横浜で開催されている1日だけの映画祭である。38回を数えた今年は同5日に開かれ、前年に公開された邦画作品の中から選んだベストテンのうち3本を関内ホールで上映。松山市を舞台に若者たちの欲望と狂気を描いた「ディストラクション・ベイビーズ」(監督:真利子哲也)や余命宣告を受けた母の奮闘と周りを取り巻く家族の物語を描いた「湯を沸かすほどの熱い愛」(監督:中野量太)を見ることができた。

同映画祭の第1回は、1980年の京浜映画劇場での開催にさかのぼる。立ち上げメンバー3人は、会社勤めの映画ファンだったようだ。北見秋満さんは彼らから運営を引き継ぎ、現在実行委員長を務めている。ヨコハマ映画祭創設当時は日本大学芸術学部映画学科に通いながら、映画館の企画などを手伝っていたという。

当時北見さんは、この映画祭のそもそもは「本当に映画を愛している人に向けた映画祭にしたい」との願いから生まれたのだと、その思いに共感していた。とはいえ、その実現と継

続は、簡単に口にはできるほどやさしいことではない。「本当に愛している人」はいったいどうすれば集まってくれるのか。現在に至る決め手は見つかっていなかった。

ヨコハマ映画祭が取った方策は、スポンサーをつけないことだった。「自分たちの映画ファンとしての感覚を大切にしたいと考えたから」と北見さんは振り返る。十分な宣伝をするには、企業などをスポンサーにつけて宣伝費を確保しようとするのが普通だ。しかし、スポンサーの意見に左右される懸念も出てくる。「意見を聞くのは大切だが、そのために自分たちの思いが伝わらない映画祭になってしまうのは避けたい」。だから今でもスポンサーをつけていない。映画を本当に愛する人々向けの内容に徹して確実に来てもらえればいい。映画祭にとって一番大切なのは映画ファンお客さまなのであり、映画ファンが自分自身では形にできていない夢や理想のベストテン、受賞者の選出があれば必ず成り立つ、との思いがある。実際、1100人収容の会場はいっぱいだった。

ヨコハマ映画祭には「新人監督を育てる」という側面がある。今年は「ディストラクション・ベイビーズ」の真利子哲也と『の・ようなもののようなもの』の杉山泰一が新人監督賞を受賞した。今、第一線で監督として活躍している石井裕也や大谷健太郎は、新しい日本映画の担い手としての才能を評価され、この映画祭で作品が上映された実績を持つ。

今回作品賞を受賞したのは、戦争と広島を背景として描き出したアニメーション映画「この世界の片隅に」(監督:片渕須直)だった。第2次大戦下の日本人の心情を、一人の若い女性の生きざまを見つめて描いた作品だ。「世界の優れた映画人たちは、ドラマチックを超えた地平を見つめて映画でしかなしえない表現に挑戦している。ヨコハマ映画祭もそうした若手のチャレンジを重視したい」と北見さんは言う。改めて、ヨコハマ映画祭で上映される若手作家の挑戦に注目してみてもはどうだろうか。

取材・文・レイアウト = 松澤遼
写真提供 = ヨコハマ映画祭実行委員会

Tamabi Report

画家たちは 江戸の「視覚の制度」からの脱却を試みた

山梨絵美子氏 (美術史家、東京文化財研究所副所長)

江戸時代の日本には「視覚の制度」があったと山梨絵美子氏は言う。オリジナリティーよりも先達の絵を写すことのほうが重視される美術界のシステムだ。幕末頃から、その制度から「脱(ぬ)ける」試みに油彩で挑む画家が増える。その流れの中で登場した黒田清輝は、美大教育で今でも基礎とされている裸体デッサンを東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部的前身)西洋画科で教員として始めた画家だった。



山梨絵美子(やまなし・えみこ)

美術史家、東京文化財研究所副所長。東京大学文学部美術史学科卒、同大学院修士課程修了。黒田清輝などを中心に日本の近代美術を研究。著書に『幕末・明治の画家たち—文明開化のはざまに』(共著)など。

6月10日、本学八王子キャンパスで東京文化財研究所副所長の山梨絵美子氏の特別講義があった。テーマは、「視覚の制度から脱(ぬ)ける試みについて、日本近代美術を例に考える」。はたして「視覚の制度」とは何なのか。そんなことから考えさせられる講義だった。

江戸時代は「絵から絵を作る時代だった」と山梨氏は話す。特に狩野派のような御用絵師の間では、オリジナリティーよりも先達の描いた絵を写して継承していくことが重要視され、システム化されていた。それが山梨氏の言う「視覚の制度」である。

その「制度」から「脱ける」べく奮闘した画家たちが、西洋美術が流入する幕末から明治にかけて多く現れた。たとえば高橋由一は、浮世絵などでは類型化されていた花魁(おいらん)の絵を、見たままのリアリティーを意識して

油彩で描いた。江戸の視覚の制度を「脱けて」本物らしく描くことに情熱を燃やしていたからだ。

山梨氏はほかにも油彩画を描いた原田直次郎、五姓田義松、山本芳翠らの画家の例を挙げ、制度から「脱ける」ことが一つの潮流をなしていたことを教えてくれた。その動きの延長ともいえる西洋画技法の導入で明治の中期以降大きな役割を果たしたのが、黒田清輝(1866~1924年)である。

黒田と言えば、思わげなポーズの裸婦像3枚を並べた《智・感・情》や淡い色彩で和装の女性を描いた《湖畔》を発表し、東京美術学校西洋画科の教員を務める中で日本の近代絵画のアカデミズムの基礎を築いた人物として知られる。だが、道のりは順風満帆ではなかった。当時の日本では裸体画を「美術」として見る

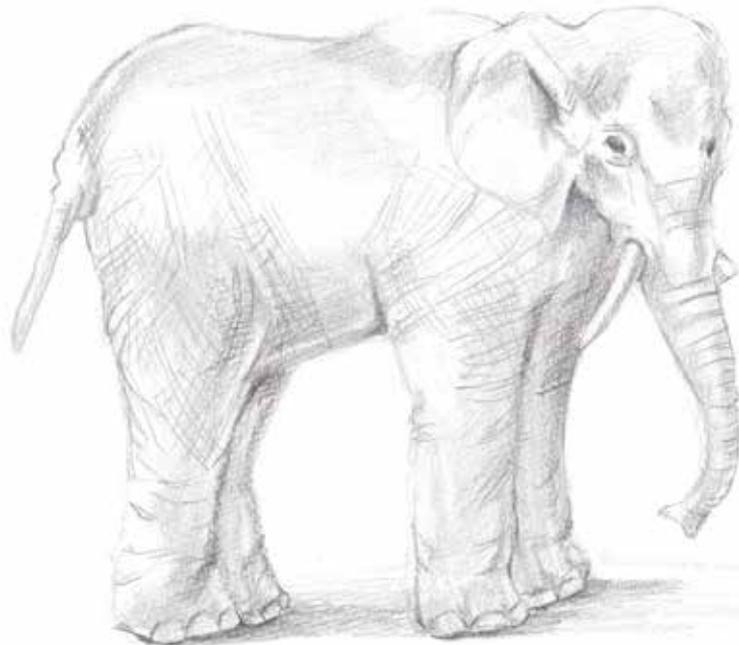
ことが一般的ではなかったため、鏡の前に立つ裸婦像を描いた《朝妝》は、論争を巻き起こした。その後、白馬会第6回展で発表した《裸体婦人像》の展示には警察が介入し、作品の一部を布で覆い隠して公開される。「腰巻事件」である。しかし黒田は裸体画が西洋の美術を理解するために欠かせない要素であることを主張し、描き続けるのである。

講義を聞いていた学生たちに山梨氏が「今でも美大は裸体デッサンを教えているのか」と問いかけたところ、多くの学生がうなずいた。裸体デッサンは黒田が東京美術学校で始めた教育の一つだ。山梨氏は、「黒田にはアヴァンギャルドな面とアカデミズムを作ることに執心した面がある。そうした二面性を持つところや自分の社会的役割を意識している姿に魅力がある」と話す。黒田が自らの信念を貫いたうえで今の美大でも核となっている教育法を打ち立てた人物と認識すると、美大に籍を置く身として大きな感慨を覚えた。

取材・文・撮影・レイアウト = 笛木一平



動物を描く



動物は文字通り「動く物」である。動物画を描くのは、モチーフがまったく動かない静物画や、モデルがじっとしてしてくれる人物画と比べて難易度が高い。写真を参考にすのも一つの方法だ。しかしすでに立体感を失っている写真と実物とでは、物の捉え方はかなり異なってくる。生き物だから生命感を存分に描き出したいと思うこともあるだろう。やはり、実物を自分の目で見ながら描くにこしたことはないのではないだろうか。



アフリカゾウ。「動物もまた観察者である」ことを認識させる。そんな側面を意識し、こちらを見る様子を描いた。しわと皮膚の硬さ、重さを表現するのに苦労した

身近にはいない動物を生で見ながらスケッチするために、5月中旬、東京・日野の多摩動物公園を訪れた。動物園でスケッチする理由は、実物を見て描けるからというだけではない。飼育されている動物についての情報がたくさんあり、その知識を踏まえることでスケッチしやすくなると考えたからだ。

まずは、園内南部のアジア園にあるモウコノウマ舎に足を運んだ。モウコノウマ、すなわち「蒙古野馬」は野生に存在する種の馬である。スケッチする前に、手がかりをつかもうと担当飼育員の生駒正和さんに話を聞いた。

「モウコノウマの観察ポイントは、サラブレッドの優美さとは対照的な野生のたくましさにある。品種改良されていない野生の姿を保っています」

なるほど、たくましさをうまく表わせれば、モウコノウマを描いた甲斐があったということになりそうだ。チャームポイントは、「モヒカンのように立っているたてがみ。ただし、年を取ると次第に寝てくる」という。

実際にスケッチブックと鉛筆を持って描いてみる。太い脚と首、大きな頭を描くだけでも、普通の馬とは違った姿になった。たてがみを特に念入りに描写した。モウコノウマならではのフォルムを描き出すことができたような気がした。

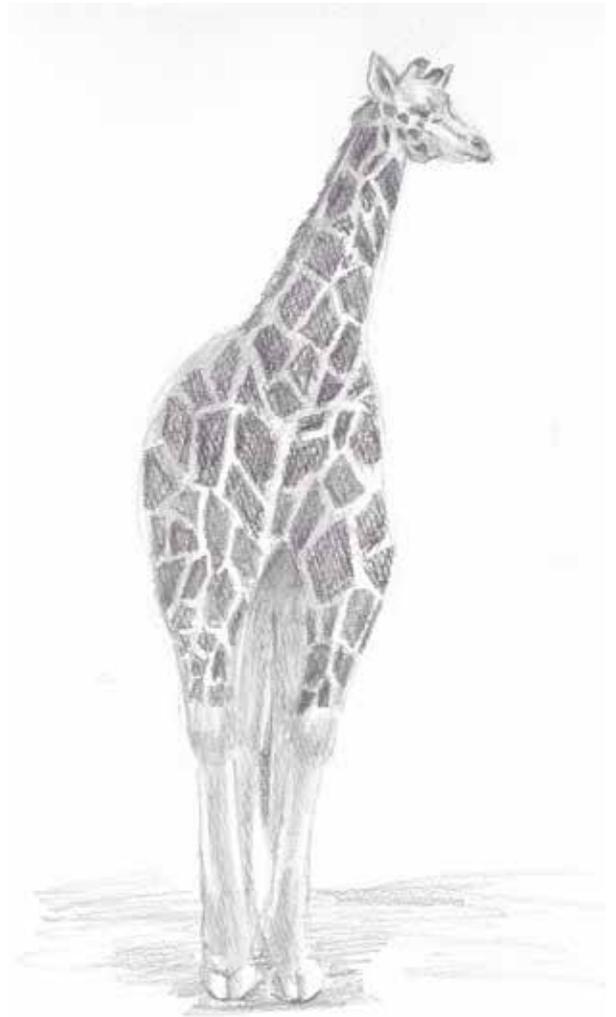
次にアフリカ園に行った。ペリカン池のペリカンたちの向こうに見えるのはキリンだ。キリンと言えば長い首が印象的である。しかし、担当飼育員の清水勲さんのアドバイスは、少々意外だった。キリンの子ども同士の繋がりが親子関係などに目を向けるといいというのである。しばらく観察していると、結構広い園内に寄り添うように固まって立っていることに気づいた。子どもだけで群れていることもあるらしい。チャームポイントは「大きな体の割に性格が穏やかな点」という。争うこともあまりない。「見ていると和むんです」と清水さん。話を聞いて描いた絵を改めて見たら、自然と優しい目を持ち、丸みを帯びたキリンになっていた。内面の特徴を把握することで、

絵の雰囲気はがらりと変わるのだ。

ペリカン池よりもさらに北に行くと、動物園の花形とも言えるアフリカゾウの姿が見えた。長い鼻にずっしりとした巨体を持つアフリカゾウ。担当飼育員の木崎恒男さんは、「観察ポイントは、ゾウ同士のコミュニケーションや仕草、そしてゾウが周りをどう見ているか。人間を含めた周囲と関係を作っているか。とする意志を感じる。実に興味深い動物です」と話す。そうか、アフリカゾウは「観察者」なのかと感心する。つぶらな瞳でこちらを見つめる絵ができた。

この体験を通じて、動物を描くにあたっては外面・内面共に特徴を捉えるのが重要なのだと思い知らされた。動物画家たちの観察眼にはひれ伏すばかりである。

取材・文・撮影・スケッチ・レイアウト
=板垣万由子



キリン。意識したのは表情や眼差しによって大きさの中に穏やかさを見せる点だ。画面に対して小さい顔に穏やかさを詰め込むのは容易ではなかった。特徴的な模様を描くのが最も難しかった

● ● まずは円で描く - 動くことへの対処 - ● ●



3種の動物をスケッチして特に難しかったのは、やはり「動く」という点だ。そこで、初めに円や楕円の組み合わせで大まかな形をとった後、パーツごとにディテールを観察して描くという方法を取った。まず、パーツごとに細かな構造を円や多角形で表しておく。動物が向きを変えてもそれぞれの幾何学形の中で描きとる作業を続ければ、ディテールも戸惑うことなく描けることが分かった。

多摩動物公園
〒191-0042
東京都日野市程久保 7-1-1

モウコノウマ。たてがみと野生ならではの力強い体型を強く意識した。餌やりタイムの直後のスケッチだったので、地面に顔を向ける個体が多かった。このスケッチでも下を向いている



展覧会の企画・運営の経験から得た物



杉山都美の作品から (1)



(2)



森本眞生《今日はきよるきよるバーゲンセール》(動画作品)より

本学科で開講されている展覧会設計ゼミの授業に、本誌の記者である自分もゼミ生として参加している。文字通り展覧会を企画・運営するのが授業の内容である。学芸員の仕事を深く知らない自分にはたしてどこまでのことができるのか。そんな思いを持ちながらも約1か月半の準備期間で開催した「TAMABI select-3」展の経験は、とても大切なことを教えてくれた。

5月23日から29日まで、本学八王子キャンパスの展示施設「アートテーク・ギャラリー」で開かれた「TAMABI select-3」展の企画・運営に携わった。同展は本学芸術学科の展覧会設計ゼミおよび構想計画設計ゼミが共同で企画・運営をし、学内や本学出身の作家の発掘を標榜して昨年5月に始まった。今回で3回目になる。

今展を担当したのは、自分を含む展覧会設計ゼミのゼミ生4人。人数の少なさに加えて、前期の授業開始後わずか1か月半で開催するという極めてタイトなスケジュールの中で行われた。経験のない自分にうまくやっつけられるのかとの思いもあったが、全員で協力すれば頑張っていけるという気持ちが心の片隅にあった。それはある種の自信にも繋がった。

今展では、本学の学部を卒業したばかりの作家を対象を定めた。卒業生の作家に豊富なネットワークがあることは美大の強みである。学内の多様な学科を歩いて情報を集め、作家を絞り、本人と連絡を取って交渉し承を得

た後に出品の段取りを進める。出品が決まったのは日本画専攻出身の佐藤健太郎さんと高橋和麻さん、油画専攻出身の杉山都美さんと矢島智美さん、グラフィックデザイン学科出身の森本眞生さん(そのうち高橋さんと矢島さんは大学院修士課程に在学中)の5人だ。作品は個性あふれるものが並んだ。例えば一見絵の具を粗く塗りたくった抽象画のように見えるが実は人物を表現している油彩画もあれば、掃除機や冷蔵庫などの私生活で使う物を組み合わせた上にそれを多彩な平べったい紐で巻きつけ、道具としての実態を失ってしまったオブジェもある。さらには、12枚の大きなパネルを横につないでできた一つの大画面に迫力のある海を描いた水墨画、一見古風な筆法で鹿などの動物や草花が独特の絵肌によって板に描かれた日本画、顔の構成物が目だけだったりアナログ時計になったりするポップなアニメーションなどさまざまな表現が展示室を埋めた。まさに「間、(ま)を生かした展示構成で各作品の魅力が伝わるような展覧会になっ

たのではないと思う。来場者はどう感じただろうか。

一つの展覧会で日本画・油画・グラフィックと別々の分野を扱うのは簡単ではない。一人の作家の個展なら、作品同士がぶつかり合うようなことはあまりなさそうだが、グループ展であれば異なる作家の作品が喧嘩しないように配慮した展示が必要になる。しかも、普通は一緒に展示されることがほぼない絵画とデザインの作品を同居させなければならない。実際に展示会場に足を運び、どの作品をどこにどう配置するか、ゼミ生4人で案を練りに練る。そのほか環境デザイン学科1年生数十人が身体を支えるものであることを前提に段ボールを使って授業で制作したそれぞれの課題も一緒に展示することになった。出品作家と作品が決まったら次にチラシやポスターなどの広報物の制作をする。1枚のチラシでも、文章の推敲や校正には手間をかけるので、実際に刷り上がるまでには結構な時間がかかる。ポスターのデザインは昨年度のものを下敷き



佐藤健太郎《巡る水、還る場所》(*2)



高橋和麻
《鎮魂の日》
(*2)



矢島智美《在処》(*2)



杉山都葵 (object 3km) (*2)



「段ボールで身体を支える」～環境デザイン学科1年の課題の展示エリア (*2)

にしながらも、変更した配色などについては全員でたくさんの候補を出して検討し、最終的に薄茶色をベースにしたものに決まった。その時によりもよかったと感じたのは、学生一人一人が意見を出し合い、お互いの言葉に慎重に耳を傾ける機会を得られたことだ。一人で考えていても袋小路にはまってしまうところを、コミュニケーションを取り合えばいいものができることを実感した。

コミュニケーションの相手はゼミ生だけではない。出品作家と実際に会うのは、極めて大切なことである。そして話していると温かな人間性が伝わってきたり、見過ごしていた表現の本質がふっと見えたりすることがある。

作品の搬入作業は力仕事で、丸1日かかるほど大変だ。しかも基本はゼミ生4人だけでやらなければならない。また、作品に傷をつけないよう、極めて慎重に行う必要がある。ここでは



(*1)

は学科内のネットワークが起きた。今は展覧会設計ゼミには所属して

いない昨年の同展の経験者や学科内の別の学生たちが手伝ってくれたのだ。つくづく助け合いは大切であると実感した。開催期間中の会場内の監視や搬出作業も分業体制。展覧会は多くの人が力を合わせて初めて成立するものであるということが身にしみて分かった。この経験はとても心に残る。

総括して思ったのは、展覧会に多くの人に来てもらうことは幸いなことではあるが、それが自分の中では大きな目標ではなかったことだ。では何が目標だったのか。たとえばどこかでこの展覧会が開かれることを知って、「これは何だろう?」というような疑問と関心を持ってもらうことこそが重要であり、目標の一部だったのだと思う。自宅と職場や学校を往復する日常に、何か斬新で新たな感覚を楽しめる世界が加われば、という気持ちで展覧会の制作に臨んでいたのだと思う。そのためには、アートと触れ合える場所である展覧会はまたふさわしい。そんなことが、この経験を通して分かった。

文・レイアウト＝新西洗之介
写真＝新西洗之介(*1)、木村友惟(*2)



これまでの「TAMABI select」展のポスターは、基本デザインが統一されている。左が今回の展覧会のもの

【展覧会情報】

「TAMABI select-3-」

多摩美術大学八王子キャンパスアートテーク・ギャラリー
2017年5月23～29日（終了しました）

※次回展のお知らせ

展覧会設計ゼミは、10月13日～26日、同じアートテーク・ギャラリーにて「家村ゼミ展 2017 高柳恵理×高山陽介×千葉正也」展を開催する予定。

zoom up

香瑠鼓さん(振付家、アーティスト)

自然や生命への「かそけき」感覚を引き出す独自のメソッドを開発

ピコ太郎が演じる「Y!mobile」のテレビCMや「21世紀少年」などの映画、舞台などで振付師やダンサーとして幅広く活躍してきた香瑠鼓さんは、広く一般の人々を見つめる別の顔を持つ。体の感覚を開く独自のメソッドとして開発した「ネイチャーバイブレーション」を、国内各地で講師として実践しているのだ。きっかけは、振付を担当した舞台公演を見て弟子入りを申し入れてきたある少女との出会いにあったという。



は、同研究所が制作した音楽を使うことで、香瑠鼓さんのメソッドの表現はさらに豊かになったという。音に包まれることによって、体の動きや共振に深化ともいえる変化が出るのだろうか。

万葉集の伴家持の歌(※)の中に、「かそけき」という言葉が出てくる。「かそけき」を精選版日本国語大辞典で引くと、「淡い音や色などがかすかであるさま」とある。「日本人は自然界の音を聴き、その物自体の存在を感じ取ることができる」と香瑠鼓さんは言う。例えば、川の流れる音を表現する「さらさら」という日本の擬音語は、英語やイタリア語にはないという。あるいは、咲き散る桜を和歌や俳句に詠んだ先人たちは、そこに宇宙の真理や哲学をも見いだしている。「かそけき」は、音や言葉に対する日本人のそんな感覚を反映している。香瑠鼓さんのメソッドは、単に動きの追求にとどまらず、その人の持てる感性を体の深奥から引き出す力を秘めているのではないだろうか。

(*1)

「ネイチャーバイブレーション」とは、大自然の中をイメージして、声や動きで自然界と共振する香瑠鼓さん独自のメソッドである。自己表現とコミュニケーションの新たな手法での追求を旨とし、各地で開催しているワークショップで、多くの人々にメソッドを伝えている。

始めるきっかけとなったのは、あるLD(学習障害)の少女との出会いだった。今から約20年前のことだ。当時の香瑠鼓さんの主な仕事は、アーティストのダンスのレッスンや公演の振付をすること。LDを持ったその少女は、客席で公演を見て、香瑠鼓さんになんと弟子入りを申し出たのである。

「その人が持っている能力を生かしたダンスができないだろうか」

障害を抱えながらもダンスに取り組み、一緒に踊る姿を見て、香瑠鼓さんはそんなことを考えるようになる。さらに重度の障害者施設にも足を運び、「どんな人の身体にも、生きる喜びがある」と直感した。健常者は、ダンスと一緒にすることで周りの人々と共振し、コミュニ

ケーションが取れる。だが、寝たきりの人は体を自由に動かすことができない。そこで気づいたのが、声を出すことも動きの一部であるということだ。声は声帯を震わせることによって出る。香瑠鼓さんは、3年間、時間を作っては大自然の中に足を運んだ。沢の水に向かって声を出し、自分の声の水と共振したと感じたとき、花や木、自然界のすべてのものが響きとして飛び込んできたという。

成果は、声や通常の体の動きの開発にはとどまらなかった。たとえば身体の中の水を感じて呼吸することで自我を静め、瞑想状態を導くことができる。あるいは、隣り合った相手と指同士を触れ合わせるコミュニケーションでは、自分の関節の動きが相手を通して感じられる。記者も取材中には、後者の実演をしてもらうと、指先から身体がほぐれていくような独特な感覚を経験することができた。実は、この指のメソッドは、音楽療法や空間プロデュースをグローバルに手掛けている井出音研究所と共同で開発しているものである。この共同開発で

取材・文・レイアウト＝山田浩子

撮影＝森山優人(*1)

写真提供＝オフィス・ルウ(*2)

香瑠鼓(かおるこ)

振付家、アーティスト。1957年東京都生まれ、早稲田大学卒。Wink「淋しい熱帯魚」、慎吾ママの「おはロック」、新垣結衣の「ポッキー」から菅田将暉の「ファンタレモン+C」CMなどの振り付けを担当。



「バリアフリーワークショップ」から(*2)



取材中に実演してもらった指のメソッド(*1)



「ネイチャーバイブレーションワークショップ」から(*2)



振付ダンスのレッスン風景(*2)

香瑠鼓カラダラボスクール
「ネイチャーバイブレーションワークショップ」
「バリアフリーワークショップ」ほか
スタジオ・ルウ
〒155-0031 東京都世田谷区北沢 1-39-7 SAビル2F-N (下北沢
駅から徒歩5分)
問い合わせ：オフィス・ルウ (TEL 03-3413-4139) まで

Whoops! の棚

多摩美生の愛読書



さまざまな美術やデザインに日々触れている多摩美大の学生は普段どのような本を読み、日常の制作や課題に生かしているのだろうか。6人の学部生に聞いた。学科によって特色や個性が出ているのが興味深かった。

『キッチン』（吉本ばなな著、新潮文庫、2002年）

芸術学科3年 箕まりな

人にはそれぞれ家族がいる。その家族を失った時、自分は何を考えるのか、自分には何ができるのか。唯一の肉親だった祖母を亡くした「キッチン」の主人公は周りの人たちによって悲しみを乗り越え、立ち直っていく話だ。情景描写がきれいで、馴染みやすい文体によって、主人公の心情がすんなり読み手の心にもしみこんでくると箕さんは言う。装丁も可愛く手に取りやすい。第6回「海燕」新人文学賞、泉鏡花文学賞受賞作。単行本は福武書店から1988年に刊行。

「デザインノート」（誠文堂新光社）

情報デザイン学科1年 菊原菜美佳

隔月刊のデザイン情報誌。文字、色、動画など毎号さまざまなテーマをすえた特集や有名デザイナーのインタビュー記事が掲載されている。デザイナーになることを目指している菊原さんは、デザイナーの実際の仕事内容を知ることができるため「視野がぐっと広がる」と言う。またこの雑誌で得た知識をもとに自分なりのデザインの制作を試みる事が可能になり、授業の課題などの制作にも役立っているという。

『ブルースカイ』（桜庭一樹著、ハヤカワ文庫JA、2011年）

絵画学科版画専攻4年 山本桃子

「グラフィックスのイメージのもとになるのはさまざまだ。中世の町を描くからといって、その時代の資料だけを見るには限らない。ぼくは毎回、まったくべつものからイメージをつくりだすことにしている。たとえば食器やケーキの山。動物のからだをばらばらにして城をつくってみたこともある」（第二部第一章より）…中世と近未来を描いたこの小説の登場人物、ディッキーは、コンピューター関連企業のグラフィックス部門で働いている。引用したのは、ディッキーが体験型の3Dグラフィックスの舞台を作っている場面だ。ディッキーは実際に買ってきたチョコレートケーキを3Dスキャナで読み込んでバーチャルリアリティを使ってケーキと食器でできた町を歩きながら、頭の中で本物の町に置き換えるなどの作業をする。山本さんは「まったくべつものからイメージを作る」ところに共感し、自身の制作にもその考え方を生かしているという。小説はまたイメージの宝庫なのである。ハヤカワ文庫、文春文庫で刊行。

『アート・インダストリー：究極のコモディティーを求めて』（辛美沙著、美学出版、2008年）

絵画学科油画専攻4年 結城鷹

アートを産業としてとらえると、どんな世界が見えてくるか。経済学・政治学・文学・社会学なども関わりを持つ「アート・インダストリー」は、取り巻く環境が日々激動している複雑な産業である。ギャラリストの著者が書いたこの本では、マーケティングや広報、資金などの観点から、商品としてのアートの見方を分かりやすく説明している。「この本に書かれているマーケティング理論は、アーティスト、キュレーターなどこれから美術業界で生きていこうという人には大いに役立つのではないかと結城さんはいう。

『世界を〈放置〉する：ものと場の思考集成』（菅木志雄著、ぶねうま舎、2016年）

工芸学科4年 井上修志

著者の菅木志雄は、戦後日本の現代美術界で興ったムーヴメントとして知られる「もの派」の代表作家。多摩美の絵画学科出身で、非常勤講師を務めたこともある。1960年末、美術の世界では従来の絵画や彫刻などの形式を逸脱する動きが加速し、当時わずかにあった美術館や伝統的な額縁には収まらず、都市景観の中に流出し始める。その頃から今日にいたる制作行為を通して、現代美術界の中に一つの杭を打ち込んだ作家の、「ものと場」をめぐる思考の跡が書かれているのが本書だ。「表現とものを作ることの固定観念を変えてくれた」と井上さんは言う。

『反芸術綺談』（菊畑茂久馬著、海鳥社）

テキスタイルデザイン学科2年 糟谷壮人

菊畑茂久馬は福岡県に住む1935年生まれの画家。前衛美術集団「九州派」の画家として活動。「奴隷系図」などの作品で知られる。書名からも分かるように、菊畑は既存の芸術観念を否定、反芸術、と言われる新たなスタイルを確立した。糟谷さんは、1960年前後のさまざまな価値観が入り乱れていた美術界の混沌ぶりを本書を通じて体感し、ばかまじめに制作するなんてナンセンスと奔放な活動をする姿勢に共感する。「普段の制作に対する考え方も変わった」という。1986年刊行、2007年新装版発行。

取材・文＝佐藤隆之 写真＝樋口皓大 レイアウト＝小川敦生

額縁・画材・デザイン用品

実施中の
お知らせ!!

多摩美術大学生支援セール

学校まで **直接配達** だから **便利!!**

詳しくは校内設置、
又は配布しております
チラシをご覧ください。

- 張りキャンバスが安い!
- 木枠、木製パネルが安い!
- カットキャンバス、
ロールキャンバスが安い!
- 油絵具、画溶液が安い!

***** 安い価格のほんの一例 *****

世界堂製張りキャンバス (カルワク) F100	大特価 ¥11,300 (税込)
世界堂製木枠 (杉材) F100	大特価 ¥13,900 (税込)
木製パネル F100	大特価 ¥13,900 (税込)
カットキャンバス 麻 100% (中目) F80	大特価 ¥4,000 (税込)
カットキャンバス 麻 100% (中目) F100	大特価 ¥4,800 (税込)
世界堂製画溶液ペインティングオイル 1,000 ml	40%OFF ¥2,650 (税込)
世界堂製画溶液テレピン 1,800 ml	40%OFF ¥4,650 (税込)
世界堂製ブラシクリーナー 2,000 ml	40%OFF ¥1,400 (税込)
世界堂ロールキャンバス C&TC 中目 1.4x10m	大特価 ¥12,700 (税込)
ホルペインアクリラジェツソ 900 ml 詰め替え	大特価 ¥1,600 (税込)

2017年5月末時点の特別セール価格です



ご注文、問合せは (株)世界堂 多摩美術大学生支援セール係
E-mail gaisho@sekaido.co.jp FAX.03-5360-4010 TEL.090-3716-4575

豊富な品揃えと満足プライス日本最大級専門店チェーン

新宿本店 TEL.03-5379-1111 〒160-0022 東京都新宿区新宿3-1-1 (営業時間 9:30~21:00まで)

池袋パルコ店 (池袋パルコ 6F)	☎03-3989-1515	相模大野店 (相模大野モアーズ4F)	☎042-740-2222
立川北口店 (クリサス立川5F)	☎042-519-3366	ルミネ横浜店 (ルミネ横浜 8F)	☎045-444-2266
アートマン店 (京王アートマンA館3F)	☎042-337-2583	ルミネ藤沢店 (ルミネ藤沢 4F)	☎0466-29-9811
町田店 (町田市原町田4-2-1)	☎042-710-5252	新所沢パルコ店 (新所沢パルコLet's館3F)	☎04-2903-6161
		名古屋パルコ店 (名古屋パルコ東館5F)	☎052-251-0404



インターネットでお買い物
SEKAIDO ON-LINE SHOP

<http://webshop.sekaido.co.jp/>
世界堂オンラインショップ 検索

情報満載!世界堂のホームページ
<http://www.sekaido.co.jp/>



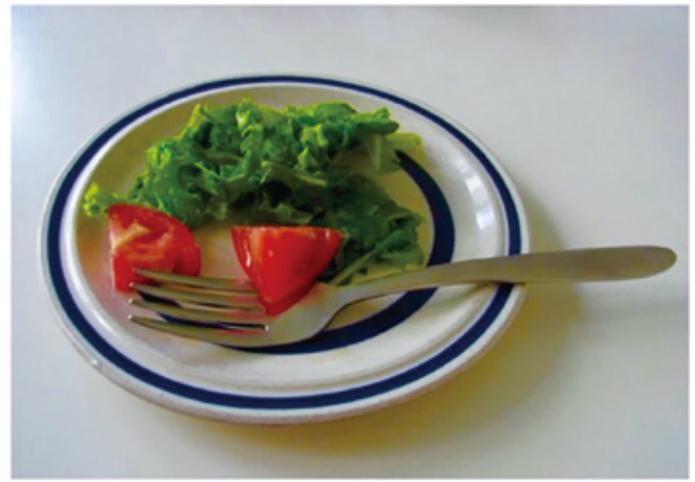
家村ゼミ展2017

高柳恵理 × 高山陽介 × 千葉正也
Eri TAKAYANAGI × Yousuke TAKAYAMA × Masaya CHIBA

Sat イベント情報
10/14 14:00→16:00

Fri 2017.10/13 → Tue 10/26
10:00→18:00
*10/15・22は休館

■トークセッション
出品作家: 高柳恵理&高山陽介&千葉正也
ゲスト: 成相肇 (東京ステーションギャラリー 学芸員・評論家)
※事前申し込み制・先着順
詳細・受け付けはHPにて



高柳恵理 《salad》2011年

会場: 多摩美術大学八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー
102・103・104・105
主催: 多摩美術大学展覧会設計ゼミ

連絡先: 多摩美術大学美術学部芸術学科研究室
〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723
Email tenrankai2017@gmail.com

Tel 042-679-5627
Fax 042-679-5649

Shin MIYAZAKI

The Earth

Which Absorbs All Things



宮崎 進

すべてが沈みる大地

2017.7.15 Sat.-10.9 Mon.

多摩美術大学美術館

Tama Art University Museum

TORSO 1993年頃 油絵具、ミカストメディア、麻布、合板 個人蔵 撮影…小林宏道